
真・恋姫†無双 ~天から来れし者~

フィリス・E・O・ナイトスター

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫十無双 ～天から来れし者～

【NNコード】

N5667T

【作者名】

フィリス・E・O・ナイトスター

【あらすじ】

変態な駄神のせいで死んだ主人公が行くのは真・恋姫十無双の世界！主人公はこの世界でどうやって過ごしていくのか！

序章 壱（前書き）

初めまして、フイリス・E・O・ナイトスター（次回から短縮します）です。

私にとってはこの作品が処女作になります。

誤字脱字が多く、駄文になるかもしれません、温かい目で見てください。

「知らない天……って見えないー真っ暗で何も見えない！」

普通いつもこのって真っ白な空間とか見慣れない天井じゃないの…？

「あ、すみません。今明かりつけますね」

「うむむ。もう少し静かにできんのか。それとお前死んでるから」

明かりがつくとそこには羽が生えた御老人と女性がいた。…って

「今もうひとつすこ」と言いましたよね！で、何で死んだんですか？」

「いや、下界に可愛い子がいたから風を起こしてスカートめぐりを
しようとしたら勢いを間違えての。」

そのせいで飛んだ看板に直撃したんじやよ

「あ、そんなことで…」

「それで私が責任をとつたこといつて、お貴方を呼んだんです
」

「責任をとるってどうあるんだ？」

「… いきなり言葉遣いが崩れたの。せめて敬語くらい使つてほし
いんじやが。一応神じやべ」

「敬語つて敬づ語つて書くんだが。そつちの女性こなりともかく、
お前に使つ必要無いだろ」

「まあいいわ。やつをの答えじやがお主にま轉生してもうつべ」

「ハシフレですね」

「じょうがなこじやる、作者に文才は一ナノも無いんじやから

「メタだな」

「と、そんな話は置いといてじやな。まあ行く世界はすでに決まつ
ておる」

「何処だ？」

「真・恋姫†無双の世界じゃ」

「ああ、某笑顔の動画で見たことがあるが。でもちうんこの先もテンプレなんだよな」

「うむ。それじゃあ」のちうんを3回振つてくれ

ええつと2、3、5か

「とこ」のとでお主の願い事を10回いづ。きりがいいのう

「お、太つ腹だな」

「まあ、やるのは私ですが」

「…」こいつは…

「この駄神にそんなことができるわけないじゃないですか。では、願いを叶つや」

「じゃあ、武と知の才能を最高クラスで。それとマンガやラノベを含めた全ての武術を使え、全ての知識をくださーい。

そして鍛えなくても衰えず、丁度いいくらいにしか見えない筋肉。身体能力を120%鬼巫女。幸運値をネギま！の椎名桜子と同じ位で」

「鬼巫女はキンクリとかは使えませんよ？」

「構いません。残りですけど転生した後も男で。容姿は気にしません。それと武器と雪村流暗記術を」

「武器の内容は後にして、雪村流暗記術とは？」

「D・・? に出てくるキャラが持つている能力で、確かに一度見聞きしたものは絶対に忘れないというものです。まあこれも某笑顔の動画で見ただけですけどね」

「そうですか。では武器の方を聞きましゅう」

「ルーチ」

一般的な日本刀より少し長い物を一振り、色は全てが純白なものと全てが漆黒のものを。

それらに刀語に出てくる絶刀『鉋』の頑丈さと斬刀『鈍』の切れ味、

双刀『鎧』の重さを持たせてください。

名前は白い方が『竈』黒い方が『溟』でお願ひします

「わかりました。では残りの2つを」

「じゃあ、落ちるところは別でいいんで俺も一刀と同じ現代からのスタートで。

最後のは保留にしてください。決まつたら教えます」

「わかりました。能力は転生が確認され次第与えます。

連絡は私の名前を頭の中で呼べば一度だけ連絡が取れるようになります」

「貴女の名前は?」

「天照大神です。では、良い人生を」

そして俺の意識は闇に沈んでいった。

序章 壱（後書き）

序章壱が終わりました。

更新速度は遅い方だと思いますが、次回をお待ちください。

序章 弐（前書き）

連投しました！

誤字脱字が多く駄文だと思いますが、温かい田で見てください。

序章 武

初めまして、自己妖怪をするのは初めてだね。
俺の名前は天伎零あまのきれいだ。

いや～転生した手の頃は色々あつたな～。名前が同じだったのはいいけど大変だつたな～食事が。

まあそんな黒歴史は置いといて、そろそろ原作が始まつてもいい頃だと思つ。

無印の開始も今ぐらいいだつたと思うからね。

それと自分で頼んどいてなんだけどこの体チートすぎや～！

小2で免許皆伝、今じゃ天伎流25代目当主だ。

頼んどいた刀は初代しか使えなかつたとか言われてるしね。

ただ一つ気になることがあるんだよ。

確かに俺は容姿は気にしないつて言つたよ？だけど男の娘にしなくていいと思うんだ。

そのせいで髪は伸ばさせられるし散々だ。

今は旋毛の所で関羽が使つている髪止めの紐が無い奴使つてるから女に見られることも少ないけど、

髪下ろすとまんま女だぜ。

声も高い方だし、名前は女にもいるような名前だから及川に告白をねたしよ。

「う、今思い出しても身の毛がよだつ。
まあいい、今日も学校へ向かうとするか。

「お、れーい！」

「一刀か、おはよう

「うふ、ワイもこるで～

「朝から元気だな、及川。何かいいことでもあったのかい？」

うん、やつぱり及川みたいなやつには某アロハシャツの座興専門家の話し方で対応するに限る。

「何もええことなんがあるかい。で、今日は何か新しい情報はあるんか？」

「ああ、今日は急遽体育で男子だけ剣道をするらしい」

「ほんとお前は何処からそんな情報を得てるんだよ

「禁則事項だ。つとここれは未来人だつたな。まあ、及川ならともかく一刀なら平氣だろ。及川ならともかく一刀は体力あるしな」

「なあ、何かある?」とこ及川ならともかくつとひのやめてくれへん?地味に傷つくわ」

「ねえとひのやけじやない。眞実が勝手に口を衝いて出るだけだ」

「…夜道に氣をつけや」

「そんな奴がいたら」つで叩き斬るだけだ」

「つーかお前もそれさえ持つてなればモテると想ひのこ」

「備えあれば憂いなしと言ひやつだ。

それとバカなことを言ひな、一刀。俺がそんなに持てるわけないだろつてなんでお前は血の涙なんて流してるんだ?」

「零つちなんか刺されてまえばえのに」

「?」

まあ、なんやかんやで放課後になつた。
まあ授業の描写なんてつまらないだろうしな。

「一刀は部活か?」

「いや、今日は休みだ

「んじゃ、2人で帰るか」

「おひ

「じゃあな、一刀

「ああ、零もまたな

そしてお互いが部屋に入った時光があふれ、光が消えた時には二人の姿は無かつた。

その日大陸に2筋の光が落ちた。

序章 弐（後書き）

これで序章が終わりました。
次回から原作の始まりです。
第壱話を待ちください。

第壱話 「舞い降りた先は……」（前書き）

フイリスです。本章第壱話を更新しました。

今回 side の表記がないところは零の視点です。

また今回からあとがきで本文に出たアニメ、ラノベ、ゲーム等の説明をします。

誤字脱字が多く、駄文になるかもしれません、温かい田で見てください。

第壱話 「舞い降りた先は…」

／？？？ side／

皆さん、初めまして。劉弁と言います。今、私と妹の劉弁はとんでもない危機に直面しています。

「さあ、劉弁様、劉協様。大人しく捕まつていただきますよ」

私たちの前にいる人たちの中で、私たちに話しかけてきたのは張讓という中常侍の一人です。おそらく周りはその部下でしょう。

「張讓、なぜこのようなことをするのですか？政の実權まつりこなら今までからあなたのものでしょう」

悔しいことに靈帝と呼ばれている父様は体が病に蝕まれていてそれをいいことに宦官たちが好き勝手やっています。その筆頭であるのがこの張讓です。

「まあ、そりなんですけどね。靈帝が病に臥せつて今、次の皇帝は劉弁様、あなただろう」

そう、そうなのです。ならばなぜこんなことをするのか意味がわからりません。

「しかしそうそろ私が皇帝になりたいのですよ。そのためあなたを捕らえ、靈帝様の死後あなたに私の子を孕ませれば私が皇帝になることができる。

そのための人質ですよ、劉協様はね」

な、なんじことを並のやしきか、この者なー。

「そのよつなーとになれば、私は自ら命を絶ちます。そんなじとは無意味ですよー。」

私は少し語勢を強めて言います。

「劉協様は人質だと言つたでしょー? その時はあなたの代わりに劉協様に私の子を孕んでもらえればいい。劉協様も死んでしまわれば、私を皇帝にすることは容易ですしね」

「や、そんな…」

そんなじとを言われたら自決などできるはずがありません。

「まあ、妹様思いの劉弁様にはそんなじとでないと思いますがね。さあ、捕えろ」

張讓の部下が私と劉協を捕まえよつと近づいて手をのばします。

捕まりたくない!

そう思つたその時、

ドオオオオオオンー!

張讓の部下を押しつぶすように何かが落ちてきました! いつたい何が!?

「な、何事だ！」

張譲もいきなりのことこ慌てていてます。そしてもうひと立ち込め
る煙の中から現れたのは

見たことない純白に煌めく服を着た男の人でした。

side end

いつてえー！

何で意識持ったままなんだよ！氣絶した状態じゃないのか。つーか
ここはどこだ？つーて、俺誰か踏んでるし！あーあ、氣絶してるよ。

俺は急いでその場からどいて立ち上がり状況把握に努めることに
した。

煙が晴れると何人かの男と、二人の女の子が向かい合つていた。つ
て、俺が踏んだ奴の姿、男の方にいる武装した奴と同じだ。とりあ
えず質問、質問！

「お取り込み中だつたら悪いんだがここはど？あんたらは誰？」

「貴様、何者だ！」

質問したのはこいつなのになぜか質問で返された。失礼な奴だ。

「あんたらに聞いても意味ないのは分かつた。で、嬢ちゃんたち、
こじは？そしてあんたらの名前は？」

初対面なので怖がらせないよう笑顔で言ひ。

「えへと、ここは洛陽です。私は劉弁と言います」

「わ、私は劉協です」

「一人とも顔真っ赤にしてどうしたんだろつか？ん、劉弁に劉協？もしかしてもう靈帝崩御後？それとも俺が来たことでイレギュラーが起こったか？」

「なあ、あなたたちの父親つて生きてるのか？」

「え、ええ。生きていますけど…」

イレギュラーの方だつたか。

「ええい、私を無視するな！この奴を先にひつ捕えろ！」

さつきの失礼な奴がさつと周りにいた奴が突つ込んできた。

だけど俺は武術の才能のおかげで氣が使える。だからこの技が使える。

「華光玉！」

そう。某幻想が住まう土地の紅い館の居眠り門番の技だ。華厳明星にしても良かつたが範囲がでかすぎるのでもちりこした。

「な、何だ今のは…」

「お前は知らないもい」とだよ」

そうこうして俺は背弄拳で男の後ろに回り、手刀を打ち込んで氣絶させる。

「で、劉弁ちゃんに劉協ちゃん。氣絶させちゃったけど」「こいつ誰だい？」

そう言つとふたりはさらに顔を赤くし、劉協ちゃんが答えてくれた。何で赤くなつたんだろつか。

「え、えつとその人は中常侍の張譲と言つ者です」

「ふ〜ん」

まあ、興味ないけどね。

「… 一つ質問してもいいですか？」

「別にいいぞ」

「貴方が今噂の天の御遣いの一人ですか？」

「天の御遣いって？」

「今この大陸には『黒天を切り裂きしづ筋の流星、この地に降り立ちこの地に泰平を齎す』と言われているんです」

「何でそつと思つたんだい？」

まあ、あんな登場の仕方をしたら仕方ないと思つたけどや。

「見たこともない服着てますし、何より姿が人間離れしてると云ふか、神々しいといふか…」

容姿の所為！？まあ、あの神の所為で凄いことになつてゐるけどさあ。ん？説明されてないつて？俺じゃなくて作者にいつてくれ。

代わりに説明するが、髪は銀色で長髪、普段は両端に波の模様が彫つてある金色の筒状の髪留め（R BORNの10年後の六 骸がつけているような物）で束ねてあり、

右が真紅で、左が青藍のオッドアイ身長は185センチ位で体重は80キロ位の8・5頭身。そして中性的な顔立ちをしている。そのせいで髪をほどくと美女に見えるらしい。いくらか説明済みのものもあつたのは御愛嬌だ。

まあこんな姿はそうそういないよね。

「俺が天の御遣いかは分からないな。…そういえば俺の名前を言つていなかつたな。俺は天伎零だ」

「字が零ですか？それと天伎とはどう姓名に分けるのでしょうか？」

「字と言つのは持つてないな。姓が天伎、名が零だ」

「…ではもしかして真名もないんでしょうか？」

「真名つて？」

本当は知つてゐるがこいつ言わないと天の御遣いと信じてもうれしいかもしれないしな。

「真名とはその者の本質を表し、本人が心を許した証として呼ぶことを許す名前のことです。本人の許可無く“真名”で呼びかけることは、

問答無用で斬られても文句は言えないほどの失礼に当たるものなんです」

「そんな名前は俺はもってないよ」

「真名が無いってことはやつぱ」「失礼します！劉弁様、劉協様、大丈夫ですか！？む、貴様何奴！」「止めなさい、瑠璃！」

「しかし！」

「この人は私たちを助けてくれたのです。ほら、足元に張譲が気絶しているでしょう」

「はあ。それは分かりましたがこの者は一体…」

「この人の名は天伎零

も、もしかして

「天の御使いです」

やつぱりかああああああああ！

第壱話 「舞い降りた先は……」（後書き）

第壱話終了しました。

今回出てきた技は二つあります。

- ・華光玉…本文で説明したとおり紅い館の居眠り門番の技。
- ・華厳明星…同上
- ・背弄拳…刀を集めると出でてくる不忍の面をつけた人の技

次回の更新をお待ちください。

第弐話 「初めての…」（前書き）

フイリスです。第弐話を更新しました。

今回も s.i.d.e の表記がないといふは零の視点です。

誤字脱字が多く、駄文になるかもしませんが、温かい目で見てください。

第試話 「初めての…」

「はい？」

うん、驚いてるね。まあ無理もないか。いきなりこの人が天の御遣いだって言われても、普通は疑つたり混乱したりするよね。

「え、えつとこの者は天の御遣いなのですか？劉弁様」

「ええ、そうですよ」

「と、とりあえず貴様を不敬罪で捕らえる…」

「うわ、ちょ、止めやつて…」

「止めなさい、瑠璃！」

「しかし天を名乗る不届き者は罰せねば…」

「つたく、俺は自分から天の御遣いを名乗つた訳じゃねえよ。ただ俺は字や真名は持つてねえし漢の民つてわけでもないだけだ」

「それを聞いた私がこの人が天の御遣いだらうと思つたのです」

「はあ、そうですか…って忘れるところだった。劉弁様、劉協様。靈帝様がお呼びです」

「わかりました。天伎さん、ついてきてください」

「了解。あんたなんて言つんだ？それと熙、呼ぶ時は零で二二ぞ」

「「わかりました」」

「…私は皇甫嵩、字は義真ぎしんです。それと私はまだ貴方のことを信用したわけじゃないので。それではついて来てください」

「靈帝様、劉弁様と劉協様をお連れ致しました」

「「つむ、入つて来い」

「「まつ」」

「さて、どんな顔してんのかね」

「おお、弁に協。無事だつたか。…む、その者は？」

「父様、この者は私たちを助けてくれた人です」

「…どーから入つてきたんじゃ？」

「え、えつと…落ちてきました」

「は？」

やつぱり靈帝さん驚いてるよ。やつや意味わからんわな、落ちてきただとか。

「張讓の部下に捕まりそうになつた時に上からズドンと…」

「そ、そ.ua。でそなたの名は?」

「姓は天伎、名は零だ。字と真名は持つてない」

「もしや、五胡の者か?」

「靈帝がそう言つと何人かの兵が武器を構えた。わーやばそー。まあ全然やばくないけど。

「違うな、俺はこの大陸の人間じゃない。劉弁に言わせると天の御遣いらしいぞ」

すると兵の一人が騒ぎだした。

「貴様、先程からの言葉遣いに加え、劉弁様を呼び捨てにしあまつさえ天の名を偽るとは…」

「おーおー。怖いねえ」

「ふざけるなー!」

「ふざけて何かいねえよ。確かに俺の国は天の国とは言われていなかつた。だが、この大陸、いやこの時代の者でないことは確かだ。なら俺が天の御遣いかどうかはこの国の者が決めること。そして、天の御遣いと認められたときに他の天にへりくだつてるのはおかしいだろ」

「」の時代の者ではないと言つたな。どうこつ意味だ？」

「その前に靈帝さん、高祖劉邦の性別は？」

「女だがそれがどうした？」

「俺はいわゆる未来から来たんだよ。たとえば靈帝さんが光に包まれて、光があさまつたら目の前に男の劉邦がいたって感じだ。

俺は昔徐福が渡つたとされる国の未来から来たんだよ」

「にわかには信じられん話だな」

「でも考えてみろ。俺はこれから起る出来事や、未来の政治などを知ってるんだぞ。十分天の知識と言えないか？」

「まあ、それはそうだろうな」

「だけど全て当たるわけじゃないがな。俺と言つ異分子がいるんだ。そのせいだ俺の知る歴史と変わる可能性がある」

「そういうものか」

「そういうものだ。幾つか質問はあるが、今の大將軍は何進か？」

「そうだったが何進の奴は今回の乱で殺された」

「なら董卓は？」

「… そういうえば張讓の奴が黄色い布をつけた賊から都を守護せせる

と言つて呼びよせておつたの

「その賊は出てき始めた所か？」

「ああ、そうだが」

「結構狂つてるな。俺が知る歴史では、黃巾の乱、さつきの賊が起
こした乱だがそれが終わつてから董卓が来て何進が死ぬものだつた」

「確かに違つてゐるな」

「で、あんたは俺をどう判断する？」

「確かにそなたの知識はまだ起こつておらぬことまで知つてゐる。
…いいだろう。そなたを天の御遣いと認めよつ」

「そりやどうも」

「ふう、なんとか天の御遣いと認めさせることは成功つと。

「はつ、何が天の御遣いだ！やつてしまえ！」

「趙忠…」

趙忠とか言つやつの命令で俺に9人程兵が向かつてきた。そのうち
趙忠と6人は周りの兵に取り押さえられたが3人が俺に向かつてき
た。

「よくそんな程度で向かつてきただな

俺は懐に入り込むと腹を殴り全員氣絶させた。

「父様！」

劉弁の声を聞いて靈帝の方を見ると今にも剣が振り下ろされようとしていた。

「俺に来たのは困つてことかよ

周りに兵はもうおりず間に合ひそうにない。…俺を除いては

「舐めるな！」

俺は隠していた竪と渾の内竪を左手に持ち、縮地で間合いを詰めその兵を居合抜きで切り裂いた。

「大丈夫ですか、父様！」

劉弁と劉協が靈帝を心配して寄つてきた。しかし、俺はその場に蹲り吐いてしまった。

「どうされたのですか！？」

「どうか怪我をされたのですか！？」

劉弁が聞いてくる。俺は劉弁たちを心配させないよつ少し茶化して言った。

「俺の国では争いなんてまず無かつたからさ。初めて人を殺してちよつと氣分が…ね。アハハ、情けない話だよ

そう言つた後自分の意識が暗転していくのがわかつた。

～劉弁 side～

父様が殺されてしまつた。そう思つたその時零さんの姿が消えたと思つたら父様を殺そうとしていた人を見たこともない武器で斬つていました。

私と協は父様が無事なのが嬉しくて、死体も気にせず近づきました。しかし、その時零さんが吐いてしまいました。

どこか怪我をしたのか？
何か病を患つていたのか？

そんなことが私の頭の中をぐるぐる回つて、ほんの少し呆然としていましたが、すぐさま何があつたのか尋ねました。

「どうか怪我をされたのですか！？」

協も私と同じようなことを思つたようです。

零さんは顔をあげて答えてくれました。

その話では零さんがいた国では争い事が無く、人を初めて殺したとのことでした。

その話を聞いた時そんな国があるのだと感心すると同時に、そんな人に人殺しをさせてしまつたと嘆きました。

口調ひそかに軽いものでしたが、その顔はひどく歪んでいました。

おそれりく私たちに心配をかけぬよひ無理をしたのでしょうか。ですが零さん。せうやつて氣を使われる方が苦しこじもあるんですよ。

そう言つた後、零さんは糸が切れたかのよひにたおれてしまひました。

↓ side end ↓

「知らない天井だ…」

俺は何でこんなとこで…つてせうだ、俺は人を殺したんだつた。

「ハハ、もう腹が空つぽで胃液すり出でこなこや」

楽観視してたなあ、こんなことになるなんて。

「ちょっと外の空氣でも吸ひつか」

そして零は城壁の上へと向かつた。

「今日は満月か…」

新月じやなくて良かつた。そんなんだつたら俺はもつと落ち込んでた。

「零さん？」

「ん？ ああ、劉弁と劉協か」

「その、体調は大丈夫ですか？」

「ううん、あまりいいとは言えないな。心配してくれてありがとな、劉協」

「い、いえ」

「零さん、今日は父様を助けていただきありがとうございました」

「お礼なんていいよ、自分の為にやつたことだから」

そう、全ては自分のためなのだ。昔からそうだった。一刀は昔からモテてたからいじめられてたことがあった。

一刀は数人なら大丈夫だったけど大人数で来ると太刀打ちできなかつた。俺は大切な友達が傷つくのを見るのが嫌で、いつも一刀に知られないように喧嘩してた。

「そう…だつたな…」

「え？」

「そうだよ、俺は一番大事なことを忘れてたんだ…」

俺は最初から自分が怯えて誰かが傷つくくらいなら、自分が傷つくことを選ぶ、そう決めてたんだ。

自己満足だ？ それの何が悪い。結局俺は我儘なんだ。俺は自分が殺した奴の命の重さなんて重すぎて背負えない。だから俺は死んだ奴が清々しすぎて怨めないほどにまで自分らしく

生きることに決めた！

「よし、元気出た！」

「い、いきなりどうしたんですか？」

「いや、ただ俺なりの覚悟を決めたってだけだ

「そ、そりですか。心配したんですよ」

「悪いな、けどもつ大丈夫だ！」

今の俺は、ちゃんと笑えていると思うから。

翌日、俺は靈帝たちと一緒に洛陽の民の前に出ていた。

「昨日、城で謀反が起こった！」

ザワザワザワ

やつぱり騒ぎ立てる奴がいるか。

「しかし朕の下に天の御使いが舞い降りこれを沈めたのだ！」

さうに騒ぎが大きくなつたな。さて俺の出番か。

「洛陽の皆、俺が天の御遣い、天伎零だ！」

俺が着てているのは聖フランチェスカの制服。協はよく晴れてるから

あつと光り輝いて見えるだり。

「俺はここを治めに来たわけではない、平和を齋しに来たんだ！」

俺がここに皇帝になる」とで平和にしたんじゃ意味がないのだ。

「俺は漢の民ではない。故にここを治めるのは漢の民である今まで通り靈帝たちになるだり。

そして俺は靈帝たちと共にこの地に平和を齋すと誓おう！」

俺は言葉に氣を乗せてくる。言靈とまではいかないまでも威厳があるよつこには聞こえるだり。

「まず初めに、ここ洛陽で悪政を行っていた宦官の処分を以て示そつと思ひう。」

これは自分から言に出したことだ。天の御遣いが悪を裁いた。それだけで今大陸に広がつてゐる天の御使いの尊の信憑性は上がり、共に歩むと言つた靈帝たち、延いては漢王朝の評判も上げる作戦だ。皆からは昨日のこともあり反対された。だけどう大丈夫だと無理やりこの案を押し通した。

「今まで行つてきた悪行の報いを受けよ！」

やつして宦官たちの首から鮮血が飛び、洛陽は歡喜に包まれた。

第3話 「初めての…」（後書き）

第3話終了しました。

今回出でた技はいかがですか。

・縮地…子供先生の出でてくる話にある氣を用いた移動術

次回の更新をお待ちください。

第参話 「一方その頃…」（前書き）

フイリスです。第参話を更新しました。

今回は一刀君の視点です。

誤字脱字が多く、駄文になるかもしませんが、温かい目で見てください。

第参話 「一方その頃」

「……流れ星？それも2筋も。不吉ね……」

「……様、出立の準備が整いました。……どうかしましたか？」

「流れ星が2筋見えたのよ」

「こんな昼間に……ですか？」

「吉兆とは思えませんね。出立を伸ばしますか？」

「……いえ、予定通り出立するわ

「承知いたしました」

「……痛つて～」

突然目の前が光ったと思ったら、今度は一体何なんだ？

確か零と別れてそれから……

「名前は……わかる。部活も、友達のことも。分からるのはこのつ
なつた前後のことか」

ああ、暗いと思つたら田を瞑つてたのか。つて

「なんじゅうじゅう一
一一一！」

目を開けると広がっていたのは一面の荒野だった。こんなところに日本にあつたのか？

「アーリーは？」

少なくとも日本ではないと思つけど、一番近いのは……砂漠かな。

おう兄ちやん、珍しい服着てんじやねえか

人だ！と思つて、声がした方を向いたら、変な格好をした3人組がいた。

「...コスプレ?」

顔は東洋系だけど、こんな服装日本じゃ見ないぞ。

意味分かんない」と語りてんじやねえぞ、お前」

「あの、すいません、どうですか？」

一 はあ?

「それと携帯持つてませんか？バツテリー切れちゃつて」

「二つ、頭おかしいんじゃないつすか？」

「俺もそう思った」

日本語が通じてゐる。ヒロとせりは日本だよな。

「ヒロ日本ですかね」

「ほんつて何だ？ そんなことより兄ちゃん、金出すわ」

「は？」

「この人が持つてゐるのつて剣か？ それも真剣。

「言葉は通じてるんだろ？ だつたら金出せや。それとその服も置いてつてもらおうか」

「ええと、これだけしかないですから……」

そう言つて俺はポケットに入つてた小銭を出す。

「なんだこりや。舐めてんじゃねえぞー！」

「アハー！」

「ぐうー。」

蹴られたせいで2転、3転と転がる。

「ふやけた」とばつかつて言ひこねと殺しつづけー。」

「待てー。」

「だ、誰だ！」

「たつた1人に3人がかりで襲いかかるなど言語道断！
そんな者どもに名乗る名などない！」

そう声が聞こえた次の瞬間、三人のうち一人が吹っ飛んでいた。

「て、てめえら、逃げるぞ！」

「逃がすか！」

助けてくれたのはいいけど、追つて行っちゃったよ。

「大丈夫ですか～？」

次に話しかけてきたのはなんだかのんびりとした雰囲気の子だった。

「傷は……大したことはなさそうだな」

もう一人のしつかりしてそうな子が立たせてくれる。

「風、包帯は？」

「もう無いですよ～。この前稟ちゃんが使っちゃったじゃないですか～」

「……そうだつたっけ？」

「いや、大丈夫だから」

そう言つてから、頭から血が出てこるので気がついた。

「なりいいんですけどー」

「やれやれ、逃げられてしまつた」

「馬でも使われたんですかー？」

「つむ、さすがに馬には勝てんかったよ」

「まあ、追い払えただけで十分ですよー」

「災難でしたね。この辺りは比較的賊は少ないのですが……」

比較的つてことは他の所でも出るのか？

「あの、風さん？」

「ひへつーー？」

「貴様ー！」

そう言つた瞬間さつきの子の槍の穂先が俺の目の前にあつた。

「な、何だー？」

「貴様、いきなり人の真名を言つとほどうこうア見だー！」

「て、訂正してくださいー！」

「は、へ、え？」

「記出しなさい。」

「わ、わかった。」「正ある、」「正あるから。」

「……結構」

「い、いきなり真名で呼ぶなんて、びっくりしちゃいましたよ~」

「いの山間だと思つんだナビ……

「あ、真名……ねえ。じゃあ、なんて呼べばいいだ？」

とつあえず真名せやばこいとは分かった。どんな初見殺しだよ

……

「は、程立と呼んでください~」

「こまは戯志才と呼んでこます」

今の絶対偽名だの……つと程立に戯志才?

「もしかして」「うひて中国~」

「星ちゃん、」の匂にそんな地名あつましたっけ~?」

「いや、聞いたことがないな。お主、どじかの貴族とお隠隠けするが、どじの出身だ?」

「えつと、日本の東京だけ……」

「ほんのとうきょう? 真、そんな地名あつたか?」

「無いわね、南方の国こもしれないけど」

「はあ?」

日本を知らないつて、あり得るのか?

「まあ、後のことは陳留の刺史殿に任せるとしようか」

「やつですね~」

「じじ~」

「ま、向こうに曹の旗が

戯志才の指した方を見ると砂煙が見えた。

「つて、三人とも俺を置いてくのか?」

「我々のような者が貴族の御子息を連れていると、よからぬ想像を
わせてしまつのですよ」

「俺は貴族なんかじゃないて」

「その辺りは自分で説明しなされ」

「え、ちよ~」

「それでは…」

「ではでは…」

そして三人はあつといつ間に俺の前から姿を消して、俺はたくさん
の騎馬に囲まれた。

「華琳様、」奴は…

「違つようつね。もつと中年の男だと聞いたもの」

「どうしましょうか」

「逃げる様子がないところとせ、関係無いのだからね…」

「せつと、我々におびえてこるのでしよう。やつは決まつてしまふ」

「……私には面食らつてこゐるよつに見えるのだけど」

誰かを探してこゐるのか?全く話が見えない。

「あの……」

「何かしら?」

れつやのはたぶん真剣だよな。

「君、誰?」

「それはいかがの台詞よ。名を尋ねるとおは自分から名乗つなさい」

「俺は北郷一刀。日本人だ」

「……はあ？」

「それより、此処はどこなんだ？」

「貴様、さつあと生国を言わんか！」

「いや、だから日本だって言つただろー。」

「姉者、さう威圧しては答えられんと思つぞ」

「しかしこ奴が賊の一昧かも知れんのだぞ！」

「春蘭、貴女にはこの者が殺氣も感じさせないほどの手練に見えるの？」

殺氣とか手練とかそういうことは零にこつて欲しい。

「それは……まあさうですが……」

「北郷だつたかしら？」

「あ、ああ

「（北郷は陳留、そして私はそこで刺史をして）いる者」

「しづ……」

「刺史も知らないの？」

「ああ

おかしいな。ニコアンス的には漢字を使つてゐるだつて、中國も日本も知らないなんて。」呆れた。秋蘭

「刺史と言つるのは街で政をして、治安維持、不審者などの捕縛及び処罰をする務めのことだ。わかるか？」

「まあ。要は警察と役所を足して2で割つたようなものか」

「また意味のわからん」と……

「要するに、税金を取つたり、法律を決めたり、街の治安を守る仕事なんだろ？」

「わかつてゐるじゃない。なら今の貴方の立場も分かるわよね？」

「税はともかく、治安はみ出してないんだ子……」

そもそも街の場所が分からぬからな。

「少なくとも、十分以上に堅じにわよ。引っ立てなさこ

「はつ」「は

「半数は残つてこの辺りを搜索、残りは一時帰還するわよ」

「はつ…」

「…もう一度聞く。名前は?」

「北郷一刀」

「…生國は?」

「日本の東京」

「…えりやつじいじまで来た」

「…に来る前後の記憶が無いから分からぬ。気がついたらあの…にいたんだ」

「…華琳様」

「埒が明かないわね。春蘭!」

「はつ、拷問でもしましようか…」

「…拷問されても知らないものは知らないって
「後はこの奴のもちものですが……」

「…の菊の彫刻は見事ね、貴方が彫つたのかしら?」

「いや、ただのお金なんだけど……」

「お金？その割には見たことない種類だけれど、その日本と並びの
はどうしてあるの？」

「まさしくこの国の名前がわからないと無理だよ」

「中国じゃないなら」「はどうなんだ？街並みは明らかに中国なんだ
けど……」

「やっぱ君たちの名前はなんて言つんだ？いつまでも君つてい
うのも何だし、さつきから呼んでるのは真名つてこうやつなんだろ
う？」

「他の国から来たつてこいつに真名のことは知つてゐるのね」

「さつき言つた助けてくれた人に聞いたんだよ。君たちのも俺が呼
んじや駄目なんだろ？」

「当たり前だ！」

「だから……さ」

「やっぱそうね。私の名前は曹孟徳、この2人は夏侯惇と夏侯
淵よ」

「は？」

「聞こえなかつた？」

「いや、聞こえたけどちよつと信じられなくて」

「の子たちがあの……だろ？」

「それ、通称とか別名とかじゃないよね？」

「何ー貴様、私が父母から頂いた大切な名前を愚弄するつもりか？」

「いやいや、違うって。それって親が三国志を好きだったから付けられたってわけじゃないんだよな？」

「三国志……とはなんだ？」

いや、三国志って中国の一大古典だろ？その名前を使つてゐるのに知らなつて。いや……せむか。でもそれだと辻褄が合つしなあ。

「なあ、もしかして今の皇帝って靈帝か？」

「ええ、そうだけれど……」

「なら、マジで君が魏の曹孟徳か？」

「あなた、なぜそれを知つてゐる？まだ誰も言つていないのでれど？ちゃんと全て説明しなきこー。」

「わかった、今の自分のことも分かつたから説明するよ。」

「……で、結局それはどういふことなのだ？」

「だから俺は未来から来たって言つてるんだよ」

「秋蘭は理解できた?」

「まあ、大体は」

「まあ、簡単にいえば、君たちが気づいたら知らない土地にいて、項羽や劉邦に会つたみたいなものだ。そんなあり得ないことが起こつてるんだよ」

「……たしかにそれなら魏といつ名前を知つてもおかしくはないわね」

「つまり……どういうことなのだ?」

「わかつてるのは今ここに北郷一刀と言う人物がいるのは確かと言つことだけだということだ、姉者」

「う、うむ?」

「これでわからないならあきらめろ、姉者」

「むむむ……」

「春蘭。色々言つたけれどこの北郷一刀は天の国から来た遣いの人なのだそうよ」

「はあ?」

「なんとー」のよつたな男が……ですか？」

「なあ、天の御遣いっていうのは何なんだ？」

「今、噂になつてゐるよ。『黒天を切り裂きし2筋の流星、この地に降り立ちこの地に泰平を齎す』っていうのがね。これからあなたは天の御遣いと名乗りなさい。それとも槍で突き殺されたいかしら？」

「て、天の御遣いでいい」

「さて、疑問が解決したところで現実的な話に入つていいか？」

「ええつと南華老仙の古書を盗んだ賊についてだつだつけ？」

それを追つて荒野を走つてたんだよな。

「そうよ、貴方は顔を見たのよね？」

「ああ。名前は分からぬけど、ひげとチビとテグの3人組だつた」

「情報とは一致してゐるわね。会えばわかるかしら？」

「ああ、わかると思ひ」

「そつ、なら私たちに協力しなさい」

「わかつた」

「随分と素直なのね」

「今までやる」とと聞えさせられへりいしかなからな」

「そのままじゃ餓死するだけだらうし。

「やうでもないわよ？貴方の未来の知識は役に立つだらうし」

「わかつた、世話になるよ」

「なら、部屋を準備わせるわ。好きに使うとこーわ」

「ありがと、助かるよ」

「やういえば一刀の真名を聞いていなかつたわね。教えてくれるか
し」

「えつと、俺は真名なんて持つてないんだけど」

「ん、どうこひことだ？」

「俺のいた国には真名なんて無かつたんだよ。強いて言えば一刀が
真名に当たるのかな」

「あなた、会つていきなり真名を呼ばせることを許してはいたという
の？」

「まあ、そつちの流派に合わせるのならそつなるのかな？」

「やうへ、ならいひからも真名を預けないと失礼でしょうね」

「は？」

「一刀、私の」」とは華琳と呼んでいいわ」

「いいのか？」

「ええ。貴女達もいいわね？」

「夏候惇はいいのか？」

「なぜ私に聞く？」

「頸、刎ね飛ばさない？」

「当たり前だ！」

「じゃあ、今曹操の真名を呼んだら？」

「それはもちろん頸を……いや蹴るだけにしてやる」

「蹴られるのかよ……」

「止めなさい、春蘭。秋蘭もいいわね？」

「ええ」

「秋蘭、お前まで……」

「私は華琳様の言つ」」とに従うだけだ。姉者は違うのか？」

「それはそうだが……さつだこいつの真名が本当かどうかわからぬではないか！」

「そんなことをした方が刎ねられるだろ……」

「あら、よくわかつてゐるわね

「……まあな

「結構。ならこれからは華琳と呼びなさい。春蘭も秋蘭もいいわね？」

「ええ

「は、はい」

「それじゃあ、これからよろしくな、華琳」

そうして俺は曹操の所でお世話になることになつた。

第参話 「一方その頃……」（後書き）

第参話終了しました。

今回出てきた技はありません。

次回の更新をお待ちください。

第肆話 「作戦開始」（前書き）

遅くなりました、フイリスです。第肆話を更新しました。

誤字脱字が多く、駄文になるかもしれません、温かい目で見てください

第肆話 「作戦開始」

（零 side）

俺が宦官を処刑した2日後、ある知らせが入った。

「董卓殿、『』到着されました！」

「うむ、わかつた。謁見の間に呼べ。零殿、おぬしは朕について来てくれ

「わかつたよ、宏さん」

俺は2日前に宏さんと呼ぶことを許された。

謁見の間に着くまでその『』と話をいつゝ想つ。

（回想）

「お主の作戦はうまくいったようだな」

「ああ、成功して良かったよ」

「それで平氣なのですか？」

「ん、何が？……つてああ、処刑したことなら平氣だよ。言つただろ？覺悟を決めたつて。だから大丈夫だよ、劉弁」

「とにかく、天伎殿……」

「劉弁たちにはまつもつたたび、俺のことは零でいいぜ。真名は無いがこれが両親からもらつた唯一の名前だからな。

真名の代わりに受け取ってくれ

「ふむ、朕も真名を預けたいといつたが、皇帝の血筋の者は伴侶にしか真名を教えてはならぬといつしきたりがあつてな。教えられんのだ。

故に朕のことは名の志と呼べ

「ん、わかつたよ、志さん

「『やん』はつけんでもいい

「あんたの方が年上だからいいんだよ。あんたも俺を呼ぶ時『殿』をつけろしな」

「ふむ、わかつたぞ」

「あ、あの私は弁と呼んでください」

「私も協でいいです」

「先程のことから貴方のことは信用できるとわかつたので、真名を預けます。私の真名は瑠璃と言います。どうぞ、受け取つてください

「瑠璃は堅いな。私は朱雛、字は公偉。真名は珊瑚だよ。よろしくね、零さん！」

「ああ。皆、改めてようじく、弁、協、瑠璃、珊瑚」

心配をかけてはいけないので、ちゃんと笑える」とを示すために微笑む。

「　　（ほふん）　　」

ん、皆なんか赤くなつてる。なんか怒らせるよつなことしたかな？つてなんか皆で内緒話し始めた。

「こつもの顔は凜々しつて感じだけど差が激しそうね～」

「ええ、あれは反則だと思います、」

「お、お姉ちや～ん」

「何も言わなくともいいわよ、協。私も同じだから」

「皆、何話してんだ～？」

「な、何にもないよ～」

「ふ～ん。まあ、いいか」

「それで零殿。今度董卓が来たときにも面位を作りつゝ思つてな。名はまだ決まつ

「くそ。どのへりこにするんだ？」

「つむ、皇帝と同じ位の面位を作りつゝ思つてな。名はまだ決まつ

ておらぬがそれだけは伝えておくれ」

「了解」

「回想 end~

「董卓殿をお連れ致しました」

俺たちがついた少し後に、董卓が連れられてやつてきた。

「失礼いたします」

「つむ、よく来てくれた」

董卓には悪いが、原作を変えるのは反董卓連合の時にする。そのために宦官が進めていたように董卓を相国にする。

「靈帝様、失礼ですがそちらの方は?」

董卓と一緒に入ってきた賈駒が俺のことを尋ねる。

「こJの者は天の御使いの天伎零殿だ。真名は無いらしいのだが、零がこちらでの真名に当たる故氣をつけるように。」

それで、こJのたび呼んだのはそなたを相国に任命するためだ」

「……私たちは大した功績も上げていませんいません。なぜでしょうか?」

「本来は張讓が洛陽の守護の為に呼んだのだが、先日悪政を行つていた宦官を零殿が処罰したときに張讓が入つていてな。

しかし、政治に携わる人数が足りなくなつたのだが、調べるとそなたは善政をしていると評判らしいのでな。ならばと相国につけよつとなつたのだ

「……わかりました。ありがたく拝命致します」

「おお、さうか！ ありがたい。後で、案内させる。しばし待て」

「はい。」

「それと零殿、お主を『双天將軍』とすることになつた」

「天と^{なら}双ぶ將軍つてことか。悪くない。
分かつたよ、宏さん」

「つむ、それは良かつた」

「ちよつと、あんた！ 靈帝様に何て言葉使いをー。」

「む、そなたは？」

「私の名は賈駆、字を文和と申します」

「ふむ、賈駆よ。この者は朕が認めているからよいのだ」

「はい、失礼しましたー。」

「よい。零殿も良いな？」

「ああ。それと宏さん、俺は少ししたら一人で漢全土を巡つてみよ

うと思ひ

「む、なぜだ？」

「一応、孫子とかの軍略が書かれた書は暗記してるからな。本格化する前に、人材を集めるためにもと思ってな。5日分ぐらいでいいから、食料を提供してもらえると助かるんだが」

「うむ、わかつた。明日には準備をさせておこう。ついでに馬も頼んでおこう。手がつけられないようなのが1頭いるらしくてな。まあ、零殿なら大丈夫だろう」

「ありがとう、助かるよ。おそらく今から起ころる乱の最終決戦場所は冀州だ。そこで瑠璃や珊瑚と落ち合つことにするよ」

最終決戦までに廻りたいのは、原作にいなかつた青州東萊郡の太史慈、冀州河間郡の張？、涼州天水郡の姜維、司隸州河内郡の司馬懿、生まれた豫州穎川郡か水鏡塾のある荊州襄陽郡の徐庶の五人の所。

予定としては天水 襄陽 穎川 河内 河間 東萊の順だ。
会つ前に途中の村などを助けられれば僥倖だ。

- - - - -

旅に出て1週間と3日ほど経ち、俺は天水に入っていた。
途中いくつもの街に立ち寄り、賊の被害があれば倒して、名を広めていった。

「いや、それにしてもこの馬は凄いな。普通の馬だともう少しかかるつて聞いてたんだけど」

俺が旅に出る日に賣つたのは漆黒の毛並みを持つ馬だつた。大きさは普通の馬と変わらないのだが、速さは汗血馬に勝るとも劣らないものだつた。俺はこの馬に『虚影』^{ルケイ}とこゝの名をつけた。

「お、街が見えてきた。よし、急げ虚影」

そうしてしばらく駆けて街に着いたが、その街並みはボロボロだつた。

「こゝの様子だと賊に襲われたところつてどこか」

街の人を探しているといきなり槍を突き付けられた。

「ん、いきなりどうした、嬢ちゃん」

「お前何者だ！賊か？」

「賊だつたらもつ襲つてると思つんだけだ。まあ、賊ではないよ」「ならこゝに何しに来た！」

「俺は今大陸中を歩きながら人を探しててな。こゝにはその通り道で来ただけだ」

「……誰を探してるんだ？」

「5人程いるんだが、ここいら辺では姜維といつ奴を探していってな

「姜維って言つのは俺のことだけど、何で探してたんだ？」

「ふうん、いわゆる俺つ娘つてやつか。別に、なんとも思わないけど。

「お前は洛陽に現れた天の御遣いについて知つているか？」

「ん？ 天の御使いの名を出した瞬間日が輝き始めたぞ？」

「ああ！ すつ」「よな～！ いきなり現れてその次の日には悪い事をしてた宦官を処刑してさー今は何か旅してるって聞いたけど……」

「お、おお。凄い反応だな。で、俺がその天の御使いだ」

「ええ～、全然そんな風には見えないけど……そんなこと言つなら証拠を見せてみろよ」

「ん～じやあほれ。武器を見せてやるよ」

そう言つて俺は氷を地面上に突き刺す。

「うわ、噂に聞いてたのと一緒にだ！ 本当に本物だつたのか～。なあ、持つてみてもいいか？」

「持てるもんならな」

「無理だと思つけど。すんごく重いし。

「何だよそれ～って重つ！」

「やつぱり無理だつたか」

「よく」んなの振れるな～。あ、返すよ。で、何で俺を?」

「ああ、そつだつたな。さつきお前の言つた通り悪い面を処罰したんだがその所為で人が足りなくてな。
俺の仲間になつてくれる奴を探してたんだ。それでお前の事を探していたんだ」

「何で俺なんだ?俺は別に有名なんかじゃないのに」

「詳しきは今は言えないが、お前はちゃんと鍛えれば強くなるつて
知つてたからかな」

「知つてた?」

「ああ。詳しきは言えないけど、天の知識だと思つてくれればいい。
他には襄陽、穎川、河内、河間、東莱に行くつもりだが、
どうだ?一緒に来る気はないか?」

「行きたいつて気持ちもあるんだけど、賊がいつ来るかわからない
し……」

「それなら俺が手伝つてやるよ。徹底的に叩き潰して、この辺りから一掃してやる。だから一緒に来てくれないか?」

「しょうがないなあ。うん、いいよ。俺はあんたについて行く

「本当か!?なら」これからよろしくな、妻維。俺のことは零でいい

ぞ。俺には真名がないからな。そう呼んでくれ」

「わかつた。私の真名は靈麟だ。れいりんこれからよろしくな、零兄」

「れ、零兄？」

「ああ、駄目か？」

「うん、ま、いつか。よろしくな、
靈麟」

それにしても分かりやすい真名だな。妻維は天水の麒麟児（すいじゅうじ）と呼ばれていたらしいし、麒麟は四靈に含まれる瑞獸だ。

「了解。確かに戦力になるのは2千程だつたな」

俺は靈麟を仲間にした後、街の人を1か所に集め自分が天の御使いであることを伝えた。

とでもいうような顔だったのだが、それを伝え一緒に戦うことこのとを告げると、どうやら希望が見えてきたようであっさり活気が戻つていった。

それから今日賊が来るまでの5日間だけだがしつかりと鍛錬をし、
靈麟には少しばかり軍略を教えていた。

「俺がまず突つ込むから靈麟は頃合いを見計らつて突撃をしかけてくれ」

「零兄は大丈夫なのか？」

「ああ、心配してくれてありがとな」

そう言つて俺は靈麟の頭を撫でてやる。恥ずかしいのか顔がいつも真つ赤になるが、なぜか撫でたくなるのだからしようがない。

「そ、それでどうなんだよ。大丈夫なのか？」

「ああ、大丈夫だよ。任せておけつて」

＼ side end ／

＼ 賊頭 side ／

「頭、前回は残念だつたつすね」

「つたく全くだよ。あの女のせいで全然奪えなかつたからな。だが今日は大丈夫だろうよ。前回よりも多く連れて来てんだ」

「そうつすね」

「頭！」

「ん、どうした？」

「何か村の前に変な男がいるんだな」

「ああ？ 何だよひとりじゃねえか。関係ねえ、殺つちまえ」

あの村には美人が多いって話だからなあ。今から楽しみだ。

＼ side end＼

＼ 零 side＼

俺は今、戦闘用の服に着替えて街の外に立っている。いつも着ているフランチエスカの制服が汚れるとまずいので、途中に寄った街で仕立ててもらった。制服とは反対に、黒を基調とし、白色の線が入っているものだ。

「止まれ、賊どもよ！」

「何だてめえは！」

この口調はあんまし得意じゃなし恥ずかしいんだがしじうが無いが。

「我こそは天の御遣いなり！ こまま立ち去り武度と街を襲わないのならよし！ 立ち去らぬのなら相応の報いが待つているだろつ！」

「生意氣いつてんじやねえぞ！ 一人で何ができるんだ…匕首せ噂も嘘なんだわつ。野郎ども殺つちまえ！」

やつぱりこなんじや止まらないよな。

「我、天伎零！天の御使いの名の下に貴様らを断罪する！」

さて、やるとしますか。

「参る！」

そう短く告げて俺は左腰に佩いている穹に氣を込める。

「零閃、昇華。秘剣、百鬼夜行！」

抜刀と共に飛んでいくいくつもの斬撃が賊を襲い、隙間を開ける。俺は縮地でその隙間に入り、

零閃で10人程斬り殺す。刀身に血が付き準備が完了する。

「斬刀狩り！」

光速を超える居合により1人、また1人と敵が死んでゆく。

「皆、行くよ！」

そう靈麟の声が聞こえたと思うと、大きく鬨の声を上げながら街の人たちが突撃してきた。

そうして戦場は乱戦状態になつた。

「お前ら、なに手こねつてやがる！」

偉そうに指示を出している男の姿が見えた。……あいつが頭か。

「斬空閃！」

俺は斬撃を飛ばしその男の首を切り裂く。

「か、頭あ！」

やつぱりあいつが頭だつたか。

「貴様らの犯した罪の報いを受けよ！」

そう言い放ち、今度は動きながら斬刀狩りを繰り出していく。

數十分後、戦場だつた場所にはいくつもの賊の死体が転がつていた。

「賊は皆死した！勝ち闇を上げろ！」

すると至る所から声が上がる。

「零兄、大丈夫だつた？」

「ああ、大事ない、。そつちも大丈夫みたいだな」

「うん！」

「さて、街に戻るぞ」

街に戻つた後、街の人からたくさんの感謝をもらつた。今は明日街を出していく準備をしているところだ。

「靈麟、準備はできたか？」

「一応できてる。でもさすがに馬までは準備できなかつたよ」

「それはじょうがないんぢやないか？まあ、馬が手に入るまでは俺の馬に乗せてやるよ。靈麟は小柄だし一緒に乗れるだろ」

「は、はあー？何言つてんだよ、そんなの恥ずかしいだろー」

「さう思つならなるべく早くお前の馬を手に入れろ」

「うー

「せういじけんなつて。金は俺が出してやるかい。さて、俺はまつ寝るがお前は？」

「俺もまつ準備は終わつたし、寝ることにある。じゃあ、明日な」

「おひ

そつ言つて別れた後、零はすぐに寝始めた。その数時間後、俺と靈麟は街の外にいた。もちろん見送りの人も大勢いるが。

「御遣い様、この度は誠にありがとうございました」

「当然のことをしたまでだ。俺は漢王朝と共にこの乱世を鎮めようとしているんだからな」

「姜維！御遣い様に迷惑かけんぢやねえぞー！」

「へんなやつ……」

「それじゃあ、そろそろ行くか。靈麟、早く乗れ」

先に靈麟を虛影に乗せ、その後ろに俺が飛び乗る。

「襄陽は……おそれくじつちだらう。虛影、頼む」

虛影は一喝きしてゅうくつと駆けだす。さて、徐庶はいるんだらうか。

天水を出で、1か月程で襄陽へとたどり着いた。

「さて、水鏡塾の場所も聞けたし後は今日泊まる宿か」

証人の一人に聞いたところ、水鏡塾は山の中腹辺りにあるらしい。

「さてこの宿は空いてるかな?先に聞いてくるから既に繋いどいてくれ、靈麟」

「わかった」

部屋が空いてるといいんだけどな。

「おひやさん、空いてる部屋はある?」

「ん、兄ちゃん一人かい？」

「いや、連れが1人いる」

「そりゃ困ったな。1人用の部屋が1部屋しか空いてないんだよ」

「しょうがないか、他の宿」「それは無理だと思つた」「何でだ？」

「さつきからついでに来てる客は他の空いてないから来たつて言つたからな」

「マジか。困ったな」

「零兄、どうしたんだ？」

「靈麟か。いや、1人用の部屋が1部屋しか空いてないらしいんだよ。他の宿もあこでないらしいしな」

「で、兄ちゃん。どうすんだ？」

「しょうがないか。おちやん、いくだ？」

「1Jの部屋だと……1Jのベッドだ」

「えじや、はー」

「ねー。おへつこつこつこつてくれ」

「行くぞ、靈麟……つて顔真つ赤にして固まつてやつてゐるよ

俺は溜息を吐くと横抱きにして部屋まで運んだ。

「おーこ、着こたでー

「へ? ひー、こつのおーっ..」

「お前が固まつてゐる間にだ。寝台お前が使つていいこだ

「じやあ零兄せうすんだよ

「俺はそいつへんの床に座り込んで寝るとある

「でもそれじやあ零兄に悪いだろ

「いいんだよ、お前がゆつくつ使え

「で、でも……」

「ここれからいいから。じやあお休みー

そう言つて俺は壁に寄つて壁に寄つて、雪と凜を抱きながら寝始める

「あ…りが……」

そつ弦かれた靈麟の言葉は意識が混濁し始めた零には届かなかつた。

↓ side end ↓

第肆話 「作戦開始」（後書き）

第肆話終了しました。

今回出てきた技は以下の通りです。

・零閃…刀を集める話に出てくる抜刀術。

・百鬼夜行…この小説オリジナルの技。零閃の技術を昇華させ、氣を刀身に乗せ、何度も居合を行い斬撃を飛ばす。

・斬刀狩り…刀を集める話に出てくる技。刀身を血で濡らし、鞘との摩擦係数を減らして光速を超える居合を繰り出す。

・斬空閃…子供先生がいる話などに出てくる技。氣を刀身に乗せ、遠距離にある物体を破壊する。

次回の更新をお待ちください。

第五話 「仲間集め」（前書き）

遅くなりました、フイリスです。第五話を更新しました。

こないだ友人に「宜蘭つて、アレ切り落とされてなかつたっけ?」と聞かれ、そう言えばそつだつたなと思いました。とりあえず、賄賂を贈つて見逃してもらつたと思つてください。

誤字脱字が多く、駄文になるかもしれません、温かい目で見てください。

第五話 「仲間集め」

（零 sides）

朝飯を適当に済ませて、今は水鏡さんと話始めたところだ。

「で、天伎殿。用とは一体何ですか？」

「俺は今共に戦う仲間を探します。ここには優秀な子が多いと聞いたんで仲間になってくれる子はいないものかと訪ねたんですよ」

「そうですか。で、誰を呼べばよろしいので？」

「徐元直殿をお願いします」

「わかりました。少しお待ちを」

「天伎殿、お連れしましたよ」

「ありがとうございます。初めまして、元直殿。俺は天の御遣い兼双天將軍の天伎零だ。よろしくな」

「は、はい！ わ、私は徐元直と言います！」

「そんなに固くならなくていいよ」

「は、はい！」

「では天伎殿。失礼ですがなぜ元直を仲間にと呼んだのでしょうか？」有名さで言えば他にもいるはずでしょ？」

「それは私も聞きたいです。私なんかより朱……孔明ちゃんや鳳統ちゃんの方が頭良いし……」

「そんなに自分を悪く言つた。それと理由だつたな。簡単に言えば、殆ど水を吸つてしまつた綿とあまり水を吸つていない綿、どつちがより多く水を吸えるかつてことさ」

「と言いますと？」

「俺のいたところには元直の国でも有名な孫子や三略等はもういるん、他にも多くの兵法書がある。それを教える時に、この国の兵法が得意だとのこの国の考え方が邪魔して俺がいた国の兵法を思い付かない可能性がある。しかしこの国の考え方には染まりきつてなく、ある程度の教養がある者なら両方の国の兵法を使いこなせると思ったんだ。何人か心当たりがあつて、その内の1人が元直殿だったというわけだ」

「そうですか。では元直、どうしますか？」

「あの……本当に私なんかでいいんでしょうか？」

「ああ。といつか元直殿がいいからこゝに来てるんだしな」

「（わ、私がいって……）」

「ん、どうかしたか？顔が真っ赤だが」

「い、いえ、大丈夫です！ その話お受けします！ 私の真名は由^ゆ里^りです！」

「それは良かった。それと仲間になったんだから話しゃすこよつこ話していいぞ。名前も好きなように呼んでいいからな」

「はい！ 今から準備してきますね！」

「ああ。出発は一日後にする予定だからゆっくり準備するといい。では水鏡殿、一日後に由里を迎えて来ますよ」

「はい、わかりました。また後日お会いします」

「はい、また後日に」

ふう、何とか目標はクリアった。黄巾の乱はまだ始まつたばかりだしこのまま順調にいけばつまく合流できるかな。

「お~い、零兄！」

「ん、靈麟か」

「どうだつたんだ？」

「ああ、無事仲間になつてもうれたよ」

「そつか。あ、そつ^ハばつま^ハに店見つけたんだ。一緒に行こうぜ」

「いいぞ。案内してくれ

そつして靈麟に付き合つたりしてこるつが一日が経つた。

「あ、零様！ あの、そちらの方は？」

「今度は様か。まあ自分で好きに呼んでくれって言つたんだししょうがないか」

「俺は姜維、真名は靈麟だ。零兄が好きに呼ばせてるから俺も真名を預けるよ。えーと……」

「私は徐庶、真名は由里です。私も真名を預けます。よろしくね、靈麟さん」

「ああ、うひうひよろしくな、由里」

「じゃあ、行きますか。では縁があつたらまた会いましょう、水鏡殿

「ええ、この縁があれば」

わて、穂川に行く必要はないから次は河内か。

「さて、皆行くぞ！」

俺たちは今河内で人探しをしている。え、此処に来るまでの旅の内

容？ つまらないな過ぎて語るまでもない。

「なあ、零兄。 そろそろ何か食べよっぜ～」

「確かに腹が減つたな。 休憩ついでに何か食べるか」

「ええ、 そうしましょう」

「さすが、 話がわかる！ そつときまればこつちだこつちー。 そつ
き街の人においしい店の場所を聞いておいたんだ～」

そつして靈麟について行くと人だかりができているのが見えた。

「早く金と食い物を持つてこい！ 僕たちじゃ黄巾党だぞ！」

「何だ？」

「あ、零兄。 何か黄巾党が人質とつて騒いでるみたいなんだよ」

靈麟と会話していると街の人々が黄巾党の三人組と話しだした。

「食料と金を出せばその娘を開放するんだな？」

「あ？ そんなのするわけねえだろ！ こんな上玉なんだ、皆で回
さねえともつたいねえだろうが」

そつ言つて捕まえている男がその娘の胸を揉む。

「嫌ああー！」

「てめえは黙つてろー。」

「ひつー。」

男は胸から手を離し静かにするよう命じる。

「あー、何かイライラしてきた」

正直言つて俺はこういう奴らに対してあまりキレイにはいられない。前世で幼馴染がそういう目にあいそうになつたり、この大陸に来た時に弁や協がそういう目にあいそうになつていていたからだろー。

「おい、あんたら。悪い事は言わねえからその娘を離せ」

「……その服、てめえ天の御遣いとか言つ奴だな。状況が見えてねえのか？ こいつを殺してもいいんだぜ？」

「そりゃ、一応忠告はしたからな」

「は？ 何言つてんだてめえ」

黄巾党の男が言つた刹那、俺は縮地でその男に近づき左手の指で刀身を挟み、右手で穹を抜刀し根元から刀身を断ち切つて、刀身を足元に捨て左手で顔面に拳を叩き込み、右側にいる男を蹴り飛ばす。

左側にいる男が俺を切つとしてくるが、再び穹で刀身を切り捨て、頭を掴み地面に叩きつけるよつに引っ張りながらそいつの顔面に膝を叩き込み投げ捨てる。

「てめえー。」

「だから言ったのに」

そう言いながら理解できなことばかりに首を振る。

「す、すげえ……」

誰かがやつと面称贊の言葉を贈り、拍手が沸き起る。

「ん、何だ?」

衝撃が来たと思つたら何故か先程助けた娘に泣き付かれていた。よつほど怖い思いをしたのだろう。だから……

「じょうがないか」

安心するまで頭を撫でてやることにした。

＼ side end／

＼人質の娘 side

「早く金と食い物を持つてこいー。俺たちや黄巾党だぞー。」

「う、何でこんなことになつたんだうつ。お昼ご飯を食べて今日のお夕飯のために買い物をして帰るうつと思つたときにつきなり後ろから捕まえられて……もう嫌。

「食料と金を出せばその娘を開放するんだな?」

も、もしかして私助かる？

「あ？ そんなのするわけねえだろ！ こんな上玉なんだ、皆で回さねえともつたいねえだろ？」

え、今何で……

「嫌ああ！」

黄巾党の男が言った言葉が理解できなくて呆然としていたらいきなり胸を触られた。そのことに驚いて私は大きく悲鳴の声を上げる。

「てめえは黙つてろ！」

「ひつ！」

怖い。一言で言つと軽く聞こえるけどそれとしか言えないほど怖い。そして先程の言葉をようやく理解することができた。私はこの人たちの慰み者にされるのだと。

「おい、あんたら。悪い事は言わねえからその娘を離せ」

そんな時、私の目の前に黒い服を着て両腰に見たこともない武器を持つた男の人が現れた。

「……その服、てめえ天の御遣いとか言つ奴だな。状況が見えてねえのか？ こいつを殺してもいいんだぜ？」

私はもうこの天の御遣いと呼ばれた人に関わって欲しくなかつた。この人の言葉は黄巾党の人にとっては傲慢に聞こえていて、それに

怒っているのだろう。だから私に関わって欲しくなかつた。怒つた
せいで酷い事をされるのは私なのだから。

「そりが、一応忠告はしたからな」

「は？ 何言つてんだてめえ」

嫌なことだけど私も黄巾党の男と同じことを思つた。だけどそう思つたその時には天の御遣いらしき人は目の前にいて、瞬く間に黄巾党を倒してしまつた。

「…………」

その男の人が何を言つてゐるのか分からなかつたが、私は気付けばその人に泣きついていた。するとその人は子供をあやすように私の頭を撫でてくれた。私はそれをただ温かいとだけ思つた。

＼ side end ／

（零 side）

「落ち着いたか？」

落ち着いて座れるところですと泣きやむのを待つてゐた俺は、頃合いを見計らつてそう話しかけた。

「……はい、もう平氣です。ありがとうござりました」

「いや、当然のこととしたまでだ」

「あの、何かお礼を……」

「そんなの必要無いよ」

「で、でも……」

「はあ、じゃあ一つ教えてほしい事があるんだけど」

「はい、何でしょうか?」

「この辺に司馬仲達殿がいると聞いたんだけど何処に住んでるか教えてくれる?」

「ふえ、私に何か御用ですか?」

まさかの本人!?

「零兄、仲達殿って?」

「ああ、俺がここに来た理由の人だ。えっと、俺は天伎零。一応天の御遣い兼双天将軍だ。こつちは俺の仲間の姜維と徐庶。用というのは仲達殿に仲間になつて欲しいんだ。こつちは」

「私が仲間に……ですか?」

「ああ、そうだ。俺たちが漢王朝をたてなおすのに協力して欲しいんだよ」

「あの、もし私が仲間になつたら何処に配属されるんでしょうか?」

「これは俺が個人的に集めてる仲間だからな。俺のところだ

「なります！ 仲間になります！」

「お、おつ、そつか。俺のことば好きに呼んでくれ

「はい、零さん！ 私の名は信乃です。皆さんにお預けしますー。」

「おつ、ひむ、よろしくな、信乃」

「俺は姜維、真名は靈麟だ。よろしくー。」

「私は徐庶、真名は由里です。よろしくお願いしますね」

「ひむ、よろしくお願いします、靈麟さん、由里さん」

「えーっと、次は何処に向かうんだっけ？」

「河間の張辽の所だ。その後で東莱の太史慈の所に向かう。さて、そろそろ黄巾党の動きも活発化してきたし、俺自身も次の策を用意したいから急げ。明日、明後日中には出発するぞ」

「分かりました。じゃあ急いで準備しますね」

「頼む。何かあつたら大通りにある北門に一番近い宿に来てくれ

「はい」

そして次の日、俺たちは次の目的地である河間に向かった。

「零さん、向こうで黒煙が上がっています！」

「分かった、急いで向かうぞ！」

「s i d e e n d」

「? ? ? s i d e ?

「はあ、はあ、はあ」

「大丈夫、桜？」

「ああ、平氣だ。この程度の敵にアタシが負けると思うのかい、
美音？」

「まったく、一度手合わせしたんだから分かるだろ？」

「それは無いだろ？けど多勢に無勢、このままだと疲れた所に一斉
攻撃を受けてお終いだよ」

「確かにね。だけど、いい方法何があるかい？」

「な、何だお前！」

「ん、賊が何やら驚いてるみたいだけど何かあったのか？」

「天の御遣い天伎零、義によつて助太刀しよう！」

天の御遣いつて今巷で話題になつてゐる奴のことか？ まあ、援軍つてのはありがたいな。

（ side end ）

（ 零 side ）

急いで村に向かうと遠くで一人の女の子が囮まれてゐるのが見えた。

「靈麟、お前は由里と信乃を守れ！ 僕はあの一人を助けに行く」

「わかった！」

さて、少しばかり暴れますか！

「百鬼夜行・式の太刀！」

「な、何だお前！」

「天の御遣い天伎零、義によつて助太刀しよう！」

「天の使いだと！？ やべえ、ずらかるぞー！」

「逃がすと思つてゐるのか？」

俺はもう一度百鬼夜行・式の太刀を放ち、そこにいた賊たちを全滅させた。

「いやー、助かったよ。ありがとう」

「いや、遠くから黒煙が上がっているのが見えたから賊かと思つて来ただけだ。見た所他の所にいた奴らは逃げたみたいだな」

「そうだね。まあ、自己紹介と行こうがじゃないの。私は太史慈、こつちが張コウだよ」

「紹介された張コウだ。宜しくな、天の御遣い殿」

「ツ！……そうか。俺は天伎零だ。好きなように呼んでくれ。余り会話の時に役職で呼ばれるのは好きじゃないんだ」

「分かったよ。で、零は何でこんなとこにいるの？　てっきり都にいると思つてたんだけど」

「ああ、俺は今、一緒に漢を立て直す為の仲間を集めていてな。その為に各地を巡っていたという訳だ」

「へえ、じゃあこっちの方にはいい人はいた？」

「もともとこっちにはある一人を探して向かつてたからな」

「ふうん、その一人つてのは誰なんだい？」

「太史慈と張コウ、お前たちだよ」

「……へえ、アタシたちはそんなに有名じゃないと思つてたんだが？」

「まあ、俺にも色々情報源つてのがあるのさ。で、返答は？」

「そうだな、じゃあ私たちと勝負しない？ 武人としてはそつちの方が人となりは理解しやすいからね」

「いい考えだ。どうだ、受けるか？」

「零ちゃん！ ってあれどうしたんですか？」

「お、いい所に来たな。仲間も来たことだしその提案、受けようじゃないか」

「よし、なら私が行くな」

「よし、なら私が行くよ！」

「いや、太史慈は『なんだから一人同時でいいぞ』
「……舐めてるのか？」

「まさか。まあ、とりあえず掛かって来い」

「桜！」

「分かつてる、美音！」

張コウが正面から双剣で連続して切りかかってくる。俺はそれをいなしていくが、危険を感じ飛び退くと鎌を潰された矢が俺の頭があ

つた場所を通過していく。そこに張口ウは双剣を振りかぶり間を詰めてくる。

「さて、終わらせるか

俺は震脚を思い切り繰り出し地を揺らす。踏み込んでいた地面が揺れたことに驚いたのか、張口ウの動きが一瞬止まってしまう。そして俺は双剣の柄頭に竇と湊の柄頭を当てて弾き飛ばし、太史慈の方に投げ飛ばす。俺はすぐさま縮地を使って二人の後ろに回り込み頸に刀の峰を触れさせる。

「勝負ありだな」

「う、うん

「や、そのようだな」

俺は竇と湊を納刀し、張口ウを立ち上がりさせる。

「で、どうだった？」

「うん、私としては十分合格点かな。桜は？」

「アタシも別にいいと思つぞ」

「じゃあ、決まりだね。私の真名は美音。これからよひしへ、零

「アタシは桜だ。よひしへ頼む、零」

「ああ、よひしへ美音、桜」

「俺は姜維、真名は零麟だ！」

「私は徐庶、真名は由里です。」

「私は司馬懿、真名は信乃。これからよろしくお願ひしますね」

「零様、向こうの方に宮軍を見つけました。旗は青の皇旗、桃色の朱旗。おそらく皇甫さんと、朱儕さんかと思われます」

「瑠璃と珊瑚か。ちよつといい、合流するわ」

「じゃあ、私と桜は荷物を持つてくるよ」

「ああ、なるべく早く頼む」

「おーい、瑠璃～、珊瑚～！」

「零殿！ もうよひしきのですか？」

「ああ、目的は達せたからね。それより今は誰が都を守っているんだ？」

「ああ、それなら董卓さんの所の呂布さんが守っていますよ」

「へえ、飛将軍がか」

「はい。それでそちらの方々は？」

「ああ、姜維に徐庶、司馬懿に太史慈と張コウだ」

その後、瑠璃たちはお互いに真名を交換し合い、連合の集結場所に向かつた。

↓ side ends ↓

第五話 「仲間集め」（後書き）

第五話終了しました。

今回で一気に仲間集めを終了させました。少し急ぎすぎたかも知れません。

真名の由来は、由里は 里で考え、信乃は里見ハ犬伝から女性らしい名前を、桜と美音はふと頭に浮かんできたものです。

少しキャラが多くなってきたので、次回から零以外の台詞の前に名前を一文字書くかも知れません。

今回出てきた技はこいつらです。

- ・百鬼夜行・式の太刀……百鬼夜行は以前説明したので省略。式の太刀は斬る物を選択できる子供先生の出てくる話の神が鳴く流派の技術。

次回の更新をお待ちください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5667t/>

真・恋姫†無双 ~天から来れし者~

2011年10月9日00時33分発行